



これってしきたりに反するでしょうか？

元旦にドサッと配達されてくる年賀状を、コタツに足を伸ばしながらゆっくりと目を通す一日本の正月の大きな楽しみです。結婚したばかりの若いカップルからは、披露宴か新婚旅行の写真つきの賀状。その翌年には写真にかわいい赤ちゃんが加わっているのが最近の“定番”です。旧友からの賀状では「あいつも元気ややっているナ」といった懐かしさも伴ってきます。

でも、毎年、受け取る年賀状の大部分は、印刷されたあいさつだけ。それでも差出人が一筆添えていればまだしも、なかには印刷文だけのもあります。これだと、仮に100通を読み終えるのにも10分ほどで終わってしまう。送り主の確認だけのようなものだからです。せっかく、ゆったりとした時なのだから、もう少し時間をかけて読ませてくれるものがあったらいいのではないかと。

そこで私自身は、10年ほど前から、少々長めの近況報告やエッセイを綴るようにしています。新年早々に長い文言は、古来のしきたりに反するかもしれませんが、心にも時間にもゆとりのある正月には、こちらのメッセージを伝え、また楽しんでいただければ、との思いからなのです。ちなみに、昨年の私の年賀状は次のような文言と挿絵でした。

明けましておめでとうございます。

先日、しばらくぶりに床屋さんに行つたときのことで。この歳でもう上のほうはかなり薄くなっています。そこで散髪が終わると掛け合ってみましたね。

「マスター、ご覧のように私の頭は他の人の髪の量の半分ですよ。はげている部分は手をかけなくてもよいし。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」。ど、その主人、なんていったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変に気を遣ってハサミを動かしているわけです。逆にこちらの方が割増料金をいただきたいくらいですよ」。敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。

ところで料金は安くならないけれど、「はげあたま」も決して捨てたもんじゃありません。「定年後を輝いて生きる」ためにはこの「はげあたま」つまり「はつらつ」と「元気に」「明るく」「楽しく」そして「まあるく」生きていくことが大事だと思ふ次第。自分が明るく輝いていけば周囲も明るくなっていくでしょう。

そんなわけで今年は「はげあたま」でいこう、なんて…。ご同輩も誇りを持ちますます輝いていきましょう。まもなく67歳を迎える「東京のドン・キホーテ」の新年の独り言でした。



2008年 元旦

この年賀状を投函してから、また思い付きました。「スペースさえあればいつでも次のような話も入れたかったなあ」と。――昔、宴会の席などで歌ったものだった。

…ドン ドン パンパドン パンパ ヲウチの親父は禿げ頭、隣の親父も禿げ頭 禿げと禿げとがけんかしてどちらも怪我(毛が)ねえでよかったな…

そう、丸い禿げ頭は他人に怪我をさせないし、その反射で社会を明るくするのに貢献(?)しているわけだし…と。

メキシコの日本人社会の中ではいかがでしょうか。やはり、年末のクリスマスカードの方が多いのでしょうか？



清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。
東京都・昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>

